

A STORY ON WHITE LINE OF 15 CENTIMETERS WIDE

幅 15 センチメートルの白線に纏つわる物語



建築は、流動的な都市の中に存在する限りその環境に対して、建築のあり方・向き合い方が必ず問われてくると考える。とある商店街で、私物の溢れ出し方を誘発するシステムとしてはたらく「道路白線」が存在していることに気づく。そこでは建築ではなく白線というミニマムな物によって人の行為がコントロールされ、都市の表層が作り出されていた。この白線を手掛かりに、今後の建築のあり方について考えられないだろうか。

そこで、2つのプロジェクトを試みた。【project 1】では路上調査から「白線」の分析を行い、その実態を記述していく。私有地の前面と道路との特殊な関係性に対する、近隣合意による建築法規緩和についての議論を提示する。公的な既存法規の考え方に対する提案。【project2】では、人間のプリミティブな行為を生んでいた「白線」という最小限の仕組みを建築空間として考えるという提案。私有地の隣地境界に共有空間をつくり、地域のネットワークとして展開していく。

【Project A】 協議書序文

調査対象地

東京都豊田市区北沢下目。下北沢駅からは2分、商店街の一角、建ち1階の高さ、建率100%と定められ、商業地域に属している。時間帯制のある一方通行の幅員5mの道路を挟み、両側に商店が並び、4m〜7mの開口の建物が並び、建物の外側には道路の敷地の高低に応じた様々な私物や私物を出している。日々の暮らしを象徴する小さなモノから生まれた風景が、都市としての大きなイメージを作りだしている。



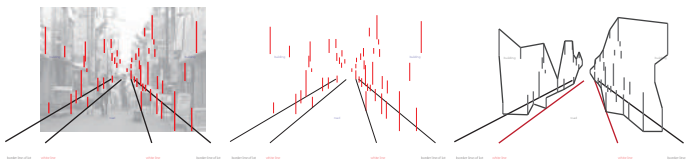
下北沢は現在、小田急線連続立体交差事業の決定をきっかけに、補助4号線の設けが決定されたことで、道路にわたる開発が行われている。開発エリアに属していない隣接するエリアにも大きな影響を与え、何らかの変化が起きると考えられる。開発エリアに隣接する商店街の一部を研究対象に選定し調査・分析を行う。

Description.1

私物が占有する空間領域

商店街の私物は、道路と建物の間を取り持つような意味をなしているのではないかと考え、商店街の風景を写した土板の写真を切り、分析を行う。商店街の公共空間に対して、様々な建物を重ね、切り出している私物「モノ」を取り出し、記述していく。すると、私物によって公共空間領域が存在することが分かる。公共空間内の、私物が占有する空間領域である。

この意味は、私物が公道に入り込むことで、私と公の緩やかな境界がくずれ、公道と建物の間の中間領域として存在している。本来、公道と私物間の緩やかな境界によって区分されているが、そのような制度は機能せず、そこには流動的な関係性によりモノの間は取り持たれている。このような、流動性をもった中間領域は都市の豊かさを考える上で、一つの可能性となりうると考える。

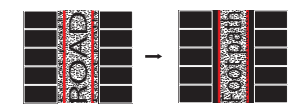


Description.3

システムとしての白線

2つの調査から下北沢の環境は、人の行為からなる環境であることが分かった。さらに、別の観点でその環境を見て、あると。商店街の白線は、私物による建物の間の関係を維持する「システム」として働いていることがわかる。この白線によるシステムは決して物理的強固なものではなく、そこを生活する人々の認識上のシステムとして存在している。

本来白線は、都市空間を安定に保つため、車道と歩道との空間を確保し、その境界としての意味を成している。しかし、現存する私物の一部は車道と歩道と、空間の意味は私物の占有する空間として働いている。さらに、この空間の私物・モノは公共空間の私物化というこの現象が顕著されていることで、この下北沢の環境が顕著になる。



意味作用の形態化



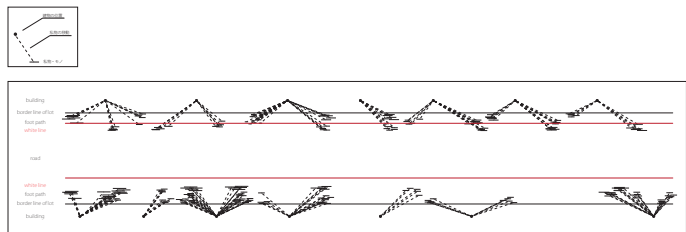
観察された環境



Description.2

流動的な空間領域の可視化

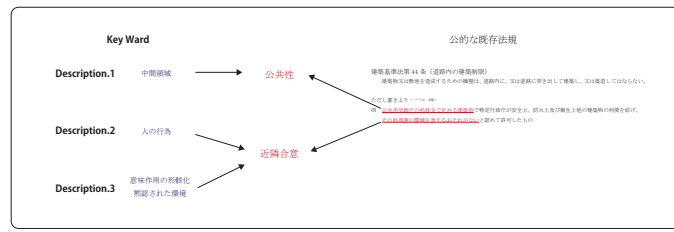
私物の流動性を可視化することで、この商店街に存在する中間領域の特性を分析する。商店街の私物の建築を分析し、可視化する目的の私物の出力をプロットを行う。モノの出力には様々な種類があり、この中にはモノの出力が行っていることから生じたモノだと考えられる。すなわち、モノの出力は、人の「行為」の痕跡を意味している。ことから、流動性をもった中間領域は、人の行為が大きく関係していることがわかる。



Regulatory relief

法規緩和

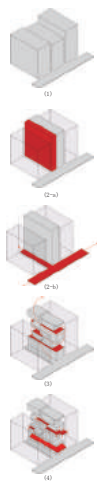
3つの記述から「公共空間の私物化による中間領域の存在」「その中間領域が私物一人の行為からなること」そして「自らの居住空間の私物化と認識された環境」これらの事実を一定の前提条件として「その中間領域の私物化による法規緩和」を提案する。この3つのキーワードを軸として、「建築法規緩和」の検討として【Project B】を展開する。



【Project B】 設計計画 環境を内包する建築

まず、**【Project A】** をもとに「白線」を対象にした建築を構成する上でのシステムを提案する。リサーチでみた、独自の環境を内包する建築を考える。私有地の隣地境界に共有空間を作ることによって前面道路だけでなく、周囲に様々な関係を築いていく。4つの建築を提示することで、現在の商店街における新たなプログラムの展開、可能性を示す。

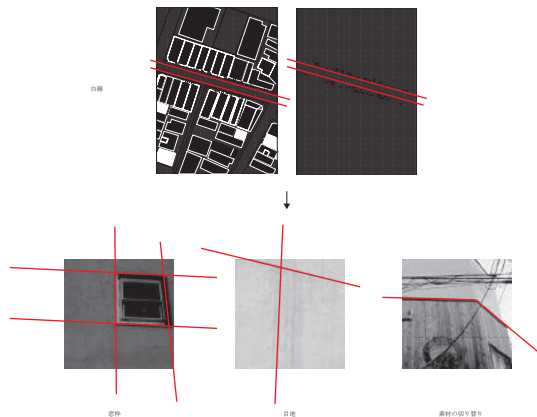
System for including the environment 環境を内包するためのシステム



- (Q1) 現状
「公」と「私」が個別化された状態
- (Q2) 建築の再配置
壁への増設を前の敷地の、30%の残余空間を前面道路と片側一方の隣地に接するようにする。公道が私有地内に延長したように繋がることで、残余空間が周辺環境と関係が築いていく。
- (Q3) 積極的Voidの取り込み
残余空間にたいして、連続するようにVoidをとりこむ。Q2の操作で都市と関係をもった状態を、上層まで引き上げる。
- (Q4) 残余空間とVoidの活用化
Q2・Q3の操作でできた立体的な残余空間を開発する建築同士が共有し、床や階段などの増設を許し半開放とすることを可能にする。公共性をもった残余空間を私有地内にもつ。

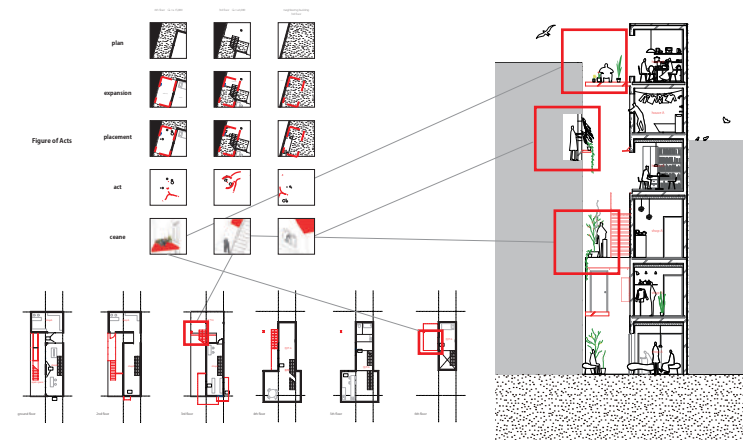
A new white line 新たな白線

私有地内に立体的に共有空間をもつことで、私有地内で空間が開かれ開口の操作が発生する。その開口の意図やコンタクトの目的地、各層素材の切り替えしラインが人の行為を誘発する「白線」となる。

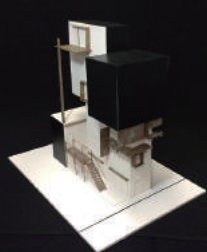


Diversion of Acts 行為の転用

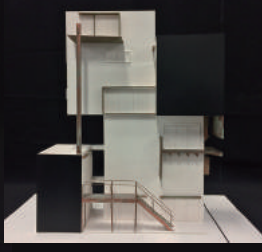
白線の意図作用が転用することで様々な人の行為が誘発されたように、人の行為が他人の行為を誘発するシステムとして転用し相互関係を築いていく。下の図 (Figure of Acts) は、1つの行為が他の行為を誘発し、それらが同時多発的に生じていることを示している。



Case 1



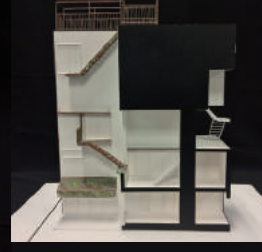
Case 2



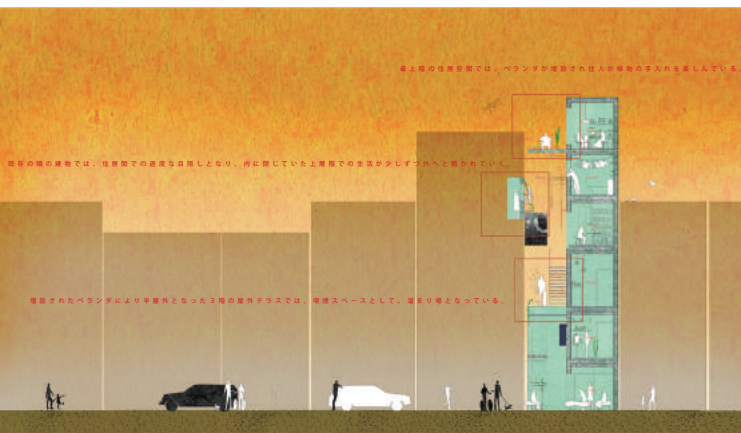
Case 3



Case 4

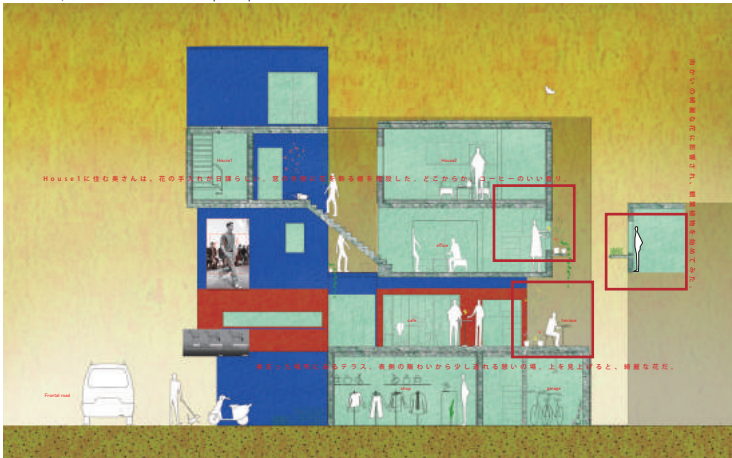


Activities between the building and the front road is drawn into the interior space of the building. And, it is pulled up to the farther layer.



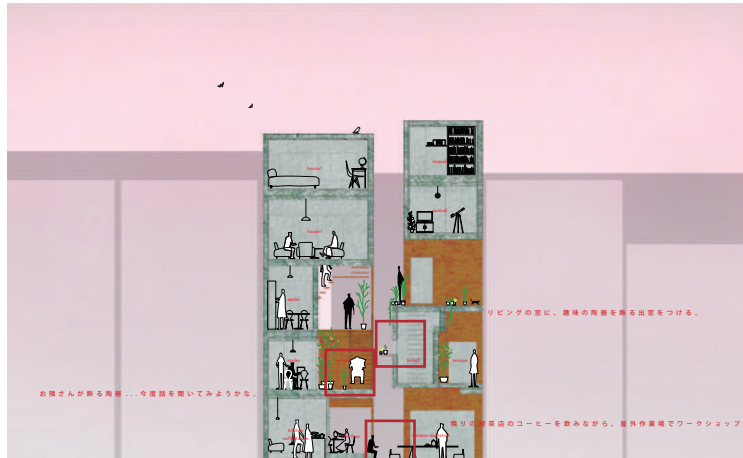
case1 AA' section 建物と前面道路の間でのアクティビティが建物の内部へと引き込まれる。そして、さらに上層へ引き上げられる。

Act of human is drawn from the front road to the void space within the private land. In addition, it is drawn into the back of the space of private land.



case2 AA' section 人の行為が、前面道路から私有地内のグライド、私有地の裏側へと引き込まれていく。

Building adjacent to each other is going birth to mutual relations.

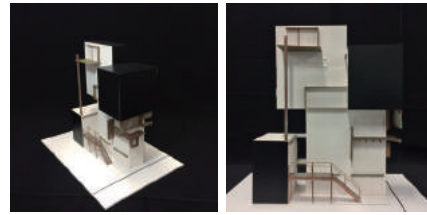
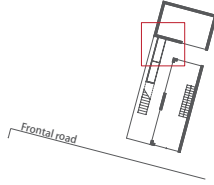


case3-case4 AA' section 隣り合う建物の間、相互関係が生まれつつある。

Case1 Cafe - Garely - House

■case1 立体的な残余空間によってコモンを生み出す

立体的な残余空間を建築に巻き込むことによって、その外部空間が1から3階へと続くショップと4階のキャットラー兼住居エントランス、さらに上層階の住居空間を預いでいく。高層階の面から3階の外部テラスが見えることで地上での高層階の眺めと上層階の住居空間を縦やりに繋いでいる。建築物という実体ではなく空間と空間を設計し、既存建築や新しく設ける住戸間の視線を往復コントロールすること。人の関係性をデザインする可能性を示している。3階のテラスにも見られるように、外部の人は自由に利用できるが私的空間を一部公共に開くことで、「見える」という新たな公共という概念をもった空間となる。このように既存の建物との隙間や残余空間に意味が加わることで、人々の関係性を豊かにする空間を生み出す。



Case2 Shop - Cafe - House

■case2 地域社会そのものをデザインする

2階のカフェがこの建築の中心となっている。2階のカフェへ行くのに必ず1階のショップの扉を通る構成となっているため、その特徴を活かし1階のショップは全面道路だけでなく後部空間に対しても開かれている。住居の打ち合わせで3階のオフィスへ向かう前に、カフェで打ち合わせの準備を行う。普段オフィスで打ち合わせの打ち合わせに2階のカフェを利用する。カフェを中心とした建物は、様々な相手と相互関係をつないでいく。建築というよりは社会システムのデザインともいえる。または地域社会そのものをデザインする空間の理想モデルである。家族を収容する住宅という概念は解体され、空間は地域に開放され、生活を支える様々な機能が存在する。既存のコミュニティを守りながら新しいコミュニティを受け入れる。

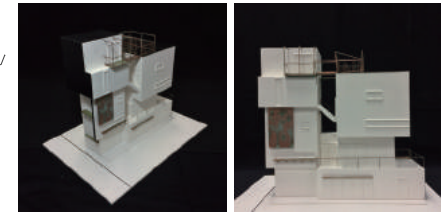
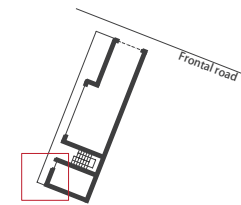


Figure of Acts Case1

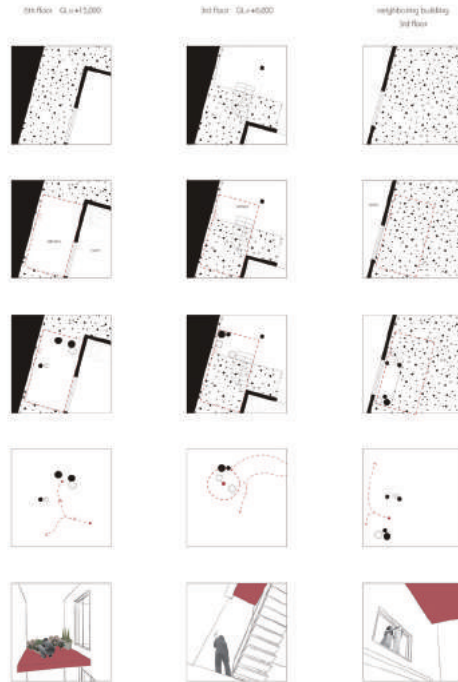
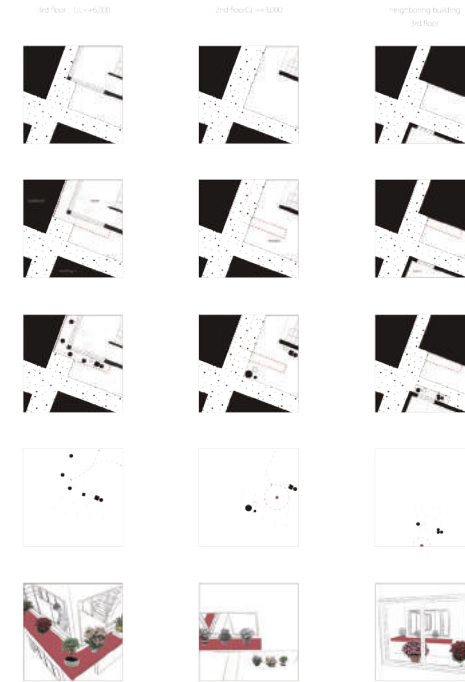
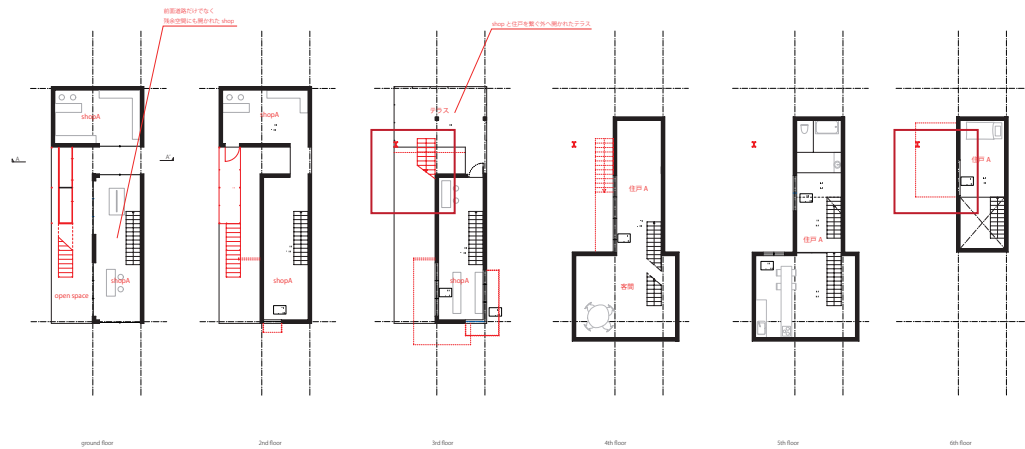


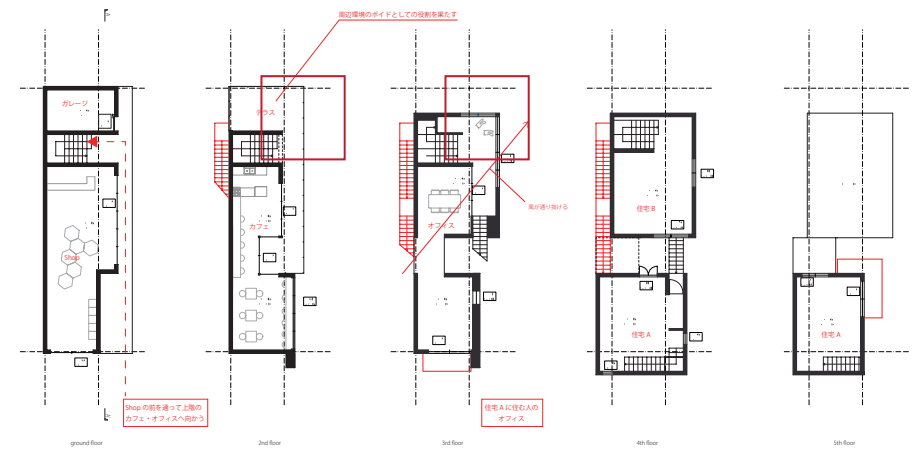
Figure of Acts Case2



Case2 Plan

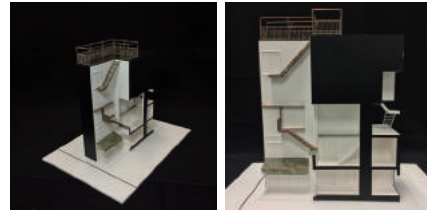
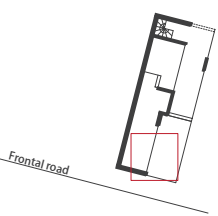


Case2 Plan



Case 3 Cafe - Office - House

■case3 社会化された空間で地域に開く
喫茶店は自宅のキッチン、オフィスは自宅の仕事場という概念からなる建築で、住宅内部の一部をシェアリングとして地域に開くという社会化されたプログラムもっている。非喫煙客への開きを生かす、1階にデザインキッチンを開いた。住宅の一部であるデザインキッチンは1階にあることで、食事は自然と開かれていく。さらに中層階のアトリウムに半外廊のテラスや土間を設置することで、アトリウム内から自然と視線が外部へと向けられる。この社会化された空間は外部からの視線を許容し、このプログラムによって、住宅は街や近隣に参加する。住宅内部ではその住人が社会化され、同時にプログラムを通して住人は近隣と繋がる。この建物は、公的領域と私的領域双方で、新しい人間関係を築く。



Case 4 Share House

- rooms 3
- share livings 2
- working space

■case4 新しいプログラムで中間集団を再編成する
「シェア」や「コレクティブ」という概念で人間の関係性を組織化しようという建築であり、これは家族という概念を超えた中間集団を支える空間である。1階に共用の作業場をもうけることで、この開かれた作業場が階層との関係を作っていく。1階の作業場、2階の共用広間をもつこの建物は、私的領域と公的（共有）領域に開くというダイナミズムを生かしている。

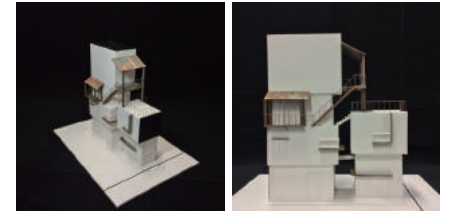
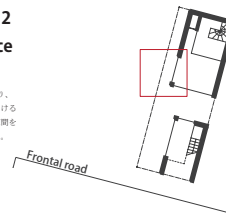


Figure of Acts
Case3

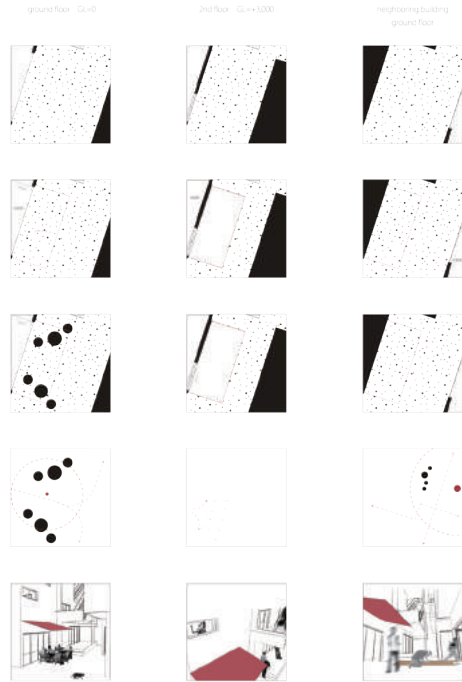
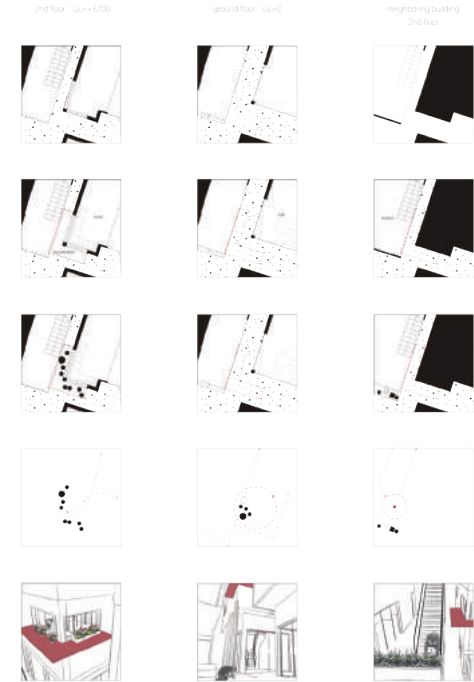
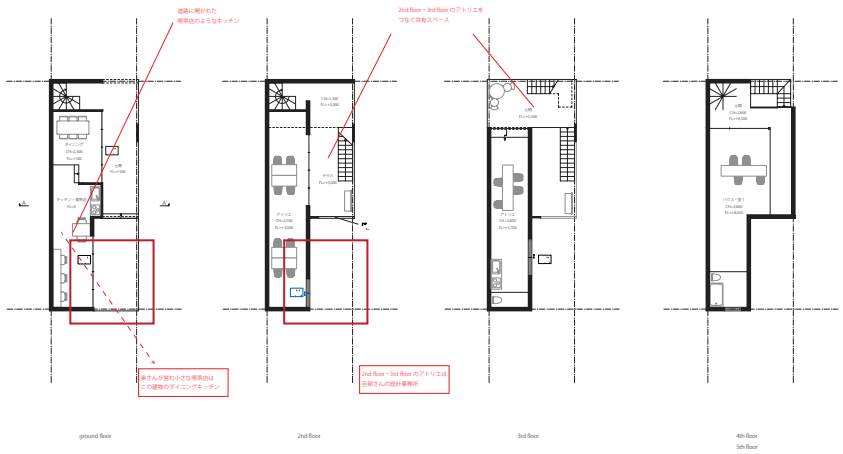


Figure of Acts
Case4



Case3 Plan



Case4 Plan

